社会科学論集　第133号　2011.6

献　　辞

経済学部教授　本　城　　昇

岩見良太郎先生は，本年3月31日をもって埼玉大学を定年退職された。岩見先生は，1994年4月に都留文科大学文学部教授から本学経済学部教授として赴任され，本学経済学部には17年間勤務された。その間，社会環境設計学科に所属され，都市行政論等の講義を担当され，都市行政のあり方，まちづくりについて理論的，実証的研究を進められ，「場所」と「場」のまちづくりを提唱されてきた。

先生は，東京大学大学院工学研究科（都市工学専攻）の修士課程の学生のときから，土地区画整理・再開発の住民運動に関わってこられ，その成果を1978年に大著『土地区画整理の研究』（自治体研究社）という形でまとめられた。この研究がご自身のその後の研究の原点となった。

先生によれば，土地区画整理や再開発は，開発利益の社会的還元という考え方によって，住民に減歩という形で公共用地の無償提供を求める日本固有の都市計画手法であるが，土地のダダ取りや強制移転など，様々な問題を含んでいるとされ，この手法の考え方は，土地を商品として取り扱い，資産としてみなすことによってはじめて可能になるとされる。確かに，その土地に愛着を持って持続的に住んでいこうする住民にとっては，その土地は商品ではなく，暮らしの基盤そのものであり，そうした手法の考え方は，その土地が住みよい持続的なまちであってほしいとする住民の願望からずれば，相容れないものとなる。

先生は，その後，開発利益の最大化を求める不動産資本の運動法則の定式化を試みられ，『土地資本論』（自治体研究社，1989年）としてまとめられた。その一方で，こうした都市開発における矛盾を克服する本当のまちづくりとは何か，住民主体のまちづくりとは何かを模索され，その課題へのとりあえずの回答として，『「場所」と「場」のまちづくりを歩く』（麗澤大学出版会，2004年）等の著作において，「場所」と「場」のまちづくりという考え方を提示された。

先生の「場所」と「場」の概念は，私には難しすぎるものであり，到底説明できるものではないが，先生のご著書によれば（前掲『「場所」と「場」のまちづくりを歩く』291～292頁），「場所」については，人々にとって重要なのは，日常生活におけるかけがえのない場所なのであり，それは，遊んだり，仕事をしたり，買物をしたり，おしゃべりしたり，子育てする場所であって，どのような場所を求めているかは，個々人によって違うとされる。そして，こうした様々な場所は，たとえ都市の物的な施設が首尾よく整備されたとしても，それだけでは実現できるものではない。「場所」の成立は，さまざまな力によって規定されるとされ，先生は，そうした力がはたらくところを「場」と名付けられた。「場」には，文化場，経済場，教育場等々があり，そうした場が集約され，折り重なって作用するところが，正にコミュニティであるとされる。地域における場所の豊かさを決めるのは，このコミュニティのあり方，その質であるとされ，今の都市計画がかくも非人間的なものになったのは，この「場所」と「場」が無視されてきたからであるとされる。まちづくりの目的が，場所づくりにあるならば，地域における様々な場の変革，創造を通じ，豊かなコミュニティづくりをしていくことが，まちづくりの課題として追求されなければならないとされる。

豊かなコミュニティーをつくる。これは，グローバリゼーションの猛威が吹きすさぶ現代において，容易なことではない。しかし，それを実現しなければ，地域社会は崩壊し，人々は孤立し，自立も互助もままならない存在となってしまうであろう。私は，先生の視点に，人への優しさを強く感じるのである。

先生は，ゼミの学生達と現地のフィールドワークを数多くこなされてきたが，現地でのヒアリング調査について，学生達が素晴らしい調査結果をもたらしてくれることを私に楽しそうに話されたことが忘れられない。調査をする者が学生達であれば，街の古老達が安心して喜んで話をしてくれるからであり，良いヒアリングになるとのことであった。私は，なるほどなあと思った。生活者を大切にする視点と若い学生の素直な心の組み合わせ，先生ならではのフィールドワークであると思った。

先生と私が所属する社会環境設計学科は，豊かなコミュニティーづくりに貢献することが求められていると思う。優れた社会性を持ち，コミュニティーを理解し，地域社会のイノベーター，コーディネーターとなる人材を送り出すことが求められていると思う。先生こそ，そのことを痛切に感じられ，ゼミ生をまちづくりの現場に連れて行かれたのだと思う。その思いは，先生が学科の懸案の課題であった学部授業科目の「社会環境設計論」の著書づくりに中心メンバーとして携わられ，2005 年に，学科所属の全教員の執筆による『社会環境設計論への招待』（八千代出版）を完成させ，同授業科目の教科書として使用できるようにすることに大変尽力されたことにも端的に現れている。

先生は，定年後も，まちづくり，豊かなコミュニティーづくりの研究に邁進され，理論的な考察を一層進められることであろう。先生から，在職中，優しい語らいの中で，コミュニティーの大切さを教えていただいたが，これからも，一人ひとりを大切にする視点から，優しい語らいの場の意識的な創出について，話をお聞きできることを期待しております。どうもありがとうございました。